

## トマス・アキナスの創造論—『神学綱要』抄訳と註釈—

Thomas Aquinas' Theory of Creation in *Compendium Theologiae*

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

## 要 約

『神学綱要』*Compendium Theologiae* の第1部「信仰について」より、神性の業について論じた箇所から数章抄訳し、それに註解をつける形で、トマスの創造論から人間の自然本性と悪への議論へのダイナミズムを示す。

**Key Words** : *Compendium Theologiae*, 『神学綱要』, 創造, 存在と無, 現実態と可能態, 自然本性と悪

## 1. はじめに

以下、『神学綱要』*Compendium Theologiae* の第1部「信仰について」より、神性の業について論じた箇所を順不同訳し、註釈を施す。定本は文献表のテキスト1. に当たる Marietti 版の *Compendium Theologiae* である。章番号は訳ごとに明示した。省略もまた明記した。

## 2. 神性の業としての存在

## 2.1 訳

## 第68章

## 神性の業と存在の第1のものについて

したがって、以上のように、神の本質の一性とペルソナの三位一体について考えた後は、残った仕事として、三位一体の業について考えなければならない。そして、事物のうちで神の第1の業は存在そのものである。他のはたらきはすべてこれを前提とし、これを基礎としている。そして、なんらかの様態で存在するものはすべて、神によって存在しているのでなければならない。そして、秩序の中にあるものすべてのうちで共通して見出されるのは、なんらかの秩序で第1にして最も完全なものは、その秩序のうちで後にある諸々のものの原因である。例えば、火が最大度に熱を有するものであり、他の熱を持つ物体のうちにある熱の原因であるように。すなわち、不完全なものは常に完全なものにその起源を有することが見出される。例えば、種子は、動物および植物にその起源を有するのである。また既に示されたように、神は第1の最も完全な存在である。それゆえに、〔神は〕存在を有するものすべてに対して、存在の原因でなければならない。

さらに、分有によって何かを有するものはすべて、本質によって有するものに、それ〔本質に

よって有するもの]を始原および原因として、還元される。例えば、火で焼かれた鉄が、その本質によって火であるものから火性を分有しているように。また既に示されているように、神はその存在そのものであるもので、存在は、その本質によって彼〔神〕に当てはまる。そして、他のすべてには、分有によって当てはまるのである。すなわち、彼〔神〕の存在は別の何かの本質ではない。というのは、絶対的な存在と自ずから自存しているものとは、既に示されたとおり、1つでなければあり得ない。したがって、すでに神は存在するものすべてにとっての存在の原因である。

## 2.2 註釈

訳の冒頭「したがって、以上のように」とはこの第68章までの議論を指している。第68章までの議論は、「したがって、以上のように」以下にあるとおり、「神の本質の一性」と「ペルソナの三位一体」についての議論であった。そして、「事物のうちで神の第1の業は存在そのものである」と言われているが、ここまでの議論の中で、神は、存在そのものであるということが述べられている。以下に、『神学綱要』第1部「信仰について」の第3章から第34章までの、神の一なる本性についてトマスが論じている議論のうち、神が存在そのものであること、神において本質と存在は一つであることに関わる議論のまとめと解釈を記す。

すべての運動変化には原因がある。その原因にはさらに原因がある。原因の原因にはさらに原因がある。このように原因の系列をさかのぼることはできるが、しかし、無限にさかのぼることはできない。ゆえに原因の系列は最終的に第1の動かす者、第1原因に行き着く。この第1の動かす者を、われわれは神と呼ぶ。

そして、神は第1原因であるがゆえに、そして動かされず、変化し得ないものであるがゆえに、部分から成立した複合体ではあり得ない。部分から複合されたものは、複合の原因がなければ成立しないからであり、かつまた、部分は複合体の中でも消滅したわけではなく全体を成立させる要素として存続しているが、そのありようは、トマスによれば全体を現実態とする可能態、すなわち全体を成立させ得る可能態としてあり、したがって、複合体においては、その成立に関して可能態と現実態とが存在しているが、第1原因にはいかなる意味でも可能態があり得ないからである。それゆえ、神には一切の複合がない。このことをトマスは、『神学大全』と同じ語を用い、神の「単一性」(simplicitas)という。

そして、そこからトマスは次のように論じる。人間の場合、白い人間には、白という人間の本質には関わりがない性質が伴う。しかし、神の場合は、単一であるがゆえに、本質と、本質にかかわりがない性質との複合がない。したがって、神は本質そのものである。

そして、神は本質そのものであるがゆえに、神の本質はその存在に他ならない。本質と存在が別であるということは「何かである」ということと「それがある」ということが別だということであるが、現実に存在するものはこの「何かである」ということと「それがある」ということとが、複合して存在している。

例えば、子どもをまだ持っていない人が、将来の自分の子どもについて考えるなら、想像され

た将来の自分の子どもは、人間としての「何かである」は有しているが、「それがある」は有していない。このように、人間である限りは、実在している人間と想像されたのみの人間は、「何かである」という本質においてはともに同じ人間であるが、「それがある」か否か、すなわち存在するかしないについては違いがある。これが存在と本質が異なるものであるということである。一方、単一である神にはどんな複合もないから、存在と本質の複合はあり得ない。それゆえ、神においてはその本質がそのまま存在でなければならない。このことは、神は常に存在するというすでに述べられたことと同義である。

以上が、『神学綱要』第1部「信仰について」の第3章から第34章までの、神の一なる本性についてトマスが論じている議論のうち、神が存在そのものであること、神において本質と存在は一つであることに関わる議論のまとめと解釈である。

そして、第68章では、熱そのものである火は熱を他のものに伝播させ、他のものが帯びている熱の原因であるように、存在そのものである神も、他の存在の原因であると言われる。本質によって存在しているのは神のみであり、他のものは本質によっては存在していないのであるから、確かに、神の存在を分有することがなければ、世界は無である。

そして、存在していないものは他のはたらきをなすこともできない。それゆえに、すべてのものは神から存在を分有させられることがなければ、それ自身のはたらきであれ、神に動かされてのはたらきであれ、はたらき得ない。これを言い換えると、「事物のうちで神の第1の業は存在そのものである」ということになる。

### 3. 無からの創造

#### 3.1 訳1

##### 第69章

##### 神はものを創造する際、質料を前提としなかったこと

そして、以上のことは、神がものを創造する際、質料を前もって必要としなかったことを示す。すなわち、はたらくものは何も、そのはたらきに、自分のはたらきによって生じるものを必要とすることはなく、そのはたらきによって生み出すことのできないものを必要とするからである。すなわち、家造りは、石と材木をそのはたらきに必要とするが、というのは、そのはたらきによってそれらを生み出すことはできないからである。そして、そのはたらきで家を生み出す。しかし、家を前提とすることはない。また、質料が生み出されるのは、神のはたらきによってでなければならない。既に示されたとおり、どんな形であれ存在するものはすべて、神を存在の原因とするからである。したがって、〔結論として〕残るのは、神がはたらく際には、質料を前提としないということである。

さらに、現実態は、自然本性的には可能態に先行している。それゆえ、より先なるものとして、それには始原として考えることが相応しい。そして、創造の際他の始原を必要とする始原はすべ

て、より後のものとして始原として考えるのが相応しい。したがって、神は最初の現実態として、諸事物の始原であるが、質料は可能態であるものとしてあるので、神が創造の際に質料を前提とするというのは〔神と質料とに〕相応しくない。

さらにまた、原因というものは普遍的であればあるほど、その業はより普遍的である。すなわち、特殊な原因は、普遍的な原因の業を、ある決まったものに相応しいものとする。この限定は、普遍的な業に対して、現実態が可能態にあるような関係にある。したがって、現実態で存在させるということの原因はすべて、その現実態のための可能態にあるものが前提とされているから、普遍的原因というものの観点で言うと、特殊な原因である。そしてこのことは、神に相応しくない。既に示されたとおり、彼〔神〕は第1原因だからである。したがって、質料をそのはたらきのために調達することもない。したがって、彼〔神〕にはものを無から存在へ生み出すということが属する。これが創造である。そしてそれゆえ、カトリック信仰は、彼〔神〕を創造者と宣言している。

## 3.2 訳2

### 第99章

#### 質料が永遠の昔に世界の創造に先行していたのは 必然だということを示す異論とその解決

また、たとえ、完全な諸事物を永遠の昔に生み出すことは〔現には〕なかったとしても、質料が永遠の昔に存在したのは必然だと思われる。すなわち、存在していないということの後に存在を有するものはすべて、存在していないということから、存在に変化する。したがって、被造の事物、例えば天と地と他のこのようなものが、永遠の昔には存在しなかったのであって、かつて存在しなかった後に、存在し始めたのだとすると、存在していないことから存在に変化した諸々のものがあると言わなければならない。ところで、変化と運動はすべて、なんらかの基体を有する。すなわち、運動は可能態のうちにある現実態だからである。また、それによってなんらかの事物が存在へと生み出される変化の基体は、生み出されたものそのものではない。すなわち、これ〔生み出されたものそのもの〕は運動の終端である。そして、運動の終端と運動の基体は同一でなく、以前言われた変化の基体は、そこで事物が生み出されるものであり、これを質料と言う。したがって、諸事物が、かつて存在しなかった後、存在のうちに生み出されたとなると、質料がそれらより先に存在したのでなければならない。また、これ〔質料〕がもしかつて存在しなかった後、生み出されたものであるなら、〔この質料もまた〕先行する別の質料を有するのではなければならないことになる。しかし、〔この過程を〕無限に進むことはできない。したがって、〔結論として〕残るのは、なんらかの永遠の質料に至らねばならないが、それはかつて存在しなかった後に生み出されたものだということである。

さらにまた、世界が、かつて存在しなかった後、始まったのなら、世界が存在する前、世界が

存在することあるいは生じることが可能だったか、可能でなかったかのどちらかである。そして、存在することあるいは生じることが可能でなかったなら、したがって、世界が存在することあるいは生じることが不可能だったということになるだろう。同じ意味であるから。そして、生じることが不可能なものは、生じないことが必然である。したがって、必然的に世界は生じなかったということになる。これは明らかに偽であるので、こう言わなければならない。すなわち、世界が、かつて存在しなかった後、存在し始めたとしたなら、〔世界が〕存在する前、まさに存在することあるいは生じることが可能であったと。したがって、なんらかのものが、世界の生じることおよび存在することへの可能態にあったということになる。そして、なんらかのものの生じることおよび存在することへの可能態にあるものは、その質料である。例えば、材木が腰掛に対してそうあるように。それゆえに、たとえ世界が常にあったわけではないとしても、質料は常にあったことは必然であると思われる。

ところで、前に示されたとおり、質料もまた、神によらずには存在しないので、同じ理由で、カトリック信仰は質料が永遠であると宣言しないのである。世界もまた永遠でないのと同じく。すなわち、このやり方〔宣言しないという表現〕で、まさに諸事物のうちにあっても神が〔すべての〕原因であること、彼〔神〕によって生み出された諸々の事物はかつてなかった後にあるようになったことが、表されねばならないのである。すなわち、以上のことが明らかに示しているのは、諸事物が自分自身によって存在するのではなく、永遠の作者によって存在することである。

ところで、既に挙げた諸々の異論によっては、我々は質料の永遠性を認めるよう強いられない。すなわち、諸事物の普遍的産出は、本当の意味では変化とは言い得ない。というのは、どんな変化のうちでも、変化の基体は変化によっては生み出されないからである。既に言ったように、変化の基体と終端は同じではないから。したがって、諸事物の、神による普遍的産出は、すなわち創造と呼ばれるものは、事物として存在するすべてに及び、このような産出は、変化の性質を本当の意味で有し得ない、たとえ、創造された事物が、かつて存在しなかった後に存在へと生み出されたのだとしても。すなわち、存在しないことの後で存在することは、基体が今欠如と形相のもとにあるということを前提としなければ変化の真の理解として十分なものではない。それゆえ、そのうちであるものがこのものより後に見られるようなある種のものの中には本来の意味で運動あるいは変化の概念は存在しない。例えば、昼の後に夜が来ると言われる時のように。したがって、世界は、かつて存在しなかった後に存在し始めたのだとしても、これはなんらかの変化によって起きたのではなく、創造によって起きたのでなければならない。まことにこれ〔創造〕は変化ではなく、被造の事物が、その存在に関して、先行する「存在しなかったこと」との関連のゆえに、創造者に依存しているというある種の関係である。すなわち、すべての変化のうちでは、今一方の終端にあり、その後に別の終端にあるという様々なあり様をする同一の何かがあらねばならない。このことは創造の場合は、事実の真理としては、見出されず、想像としてのみ、一にして同一の事物が以前には存在しなかったが、その後に存在しているということが想像されるという形で、見出される。

同じく、また第2の異論も説得力がない。たとえ、世界が存在する〔ことを始めた〕以前には存在することあるいは生じることは可能であったと言うことが真であるとしても・正しく言えるとしても、それでもやはり、このことをなんらかの可能態とする観点で言わねばならないということにはならない。すなわち、言表において「可能である」〔という語〕は、真理のある様態を表しており、すなわち、必然でもなく、不可能でもないということを表すものとして言われる。それゆえ、このようなもの「このような意味での「可能である」という語〕は、アリストテレスが『形而上学』第7巻〔第4巻第12章〕で教えているように、なんらかの可能態のゆえ〔何らかの可能態が存在するゆえ〕に「可能である」と言われている。

また、もし、なんらかの可能態によって世界が存在することは可能であると言われるなら、受動的可能態のゆえにそう言われるというのではなく、能動的受動態によってそう言われるのでなければならぬということになり、すなわち、世界が存在する以前に、存在することが可能であったと言われているような意味で、神が世界を存在のうちに生み出す以前に、存在のうちに生み出すことができたと理解されることになる〔これは不合理だ〕。それゆえに、我々は、質料が世界に先立って存在していたと認めるよう追い込まれはしない。したがって、カトリック信仰は、神とともに永遠であるものを何もかも認めず、それゆえに、「見えるものと見えざるものすべての創造者にして造り手」と宣言しているのである。

### 3.3 註釈

「存在しなかった」ということ、あるいは「存在しない」ということと「存在する」ということは決定的に違う。創造は変化では決してない。何かが存在しなかったという時、潜在的にそのものであるものが存在以前にあって、それがそのものになったということはない。こうであるならば、それは変化によって生じたのであって、創造によって生じたのではない。現実態と可能態で論じるなら、現実態はもちろん存在であり、神から存在を分有させられなければならない、すなわち創造されねばならない。そしてまた、可能態も存在であり、神から存在を分有させられるのでなければ、可能態としてすら存在し得ない。質料の中でも何の性質も持たない第1質料は、純然たる可能態とされるが、それがあろうということは無ではないということである。すなわち、存在以前に可能態があるというのであれば、それは無ではない。どんなものでも、その素材としての質料があつて、それがそのものになり得るというのであれば、潜在的に質料のうちに存在していたということになり無ではない。本当の無においてはどんなものでも無であり、存在するものは無のうちにそれ自身と同一のものを生み出すことは、想像においてでしか可能でなく、事実においてはあり得ない。

ここで強調しておきたいのは、存在するということ、あるいは神から見ると、存在せしめるということは、通常の変化とはまったく異なる特別の現象だということである。これは、存在そのものを原因としてしか起こり得ないことであり、たとえ人間に可能な間隔に始まる知識としては得られないとしても、論理的には、世界が存在するという事実から、存在そのものという世界

の第1原因の存在を帰納するのでなければ、不合理に陥らざるを得ないと感じられるほどである。しかし、質料すなわち物質は永遠とは言えなくとも、次の異論のように、時間は永遠であるという異論もまた考えられる。そして、時間は運動変化によって計られるのであるから、運動変化し得るものはなんらかの質料であると考えざるを得ないとするなら、この物質的世界以前にも物質的世界があったという形で、質料の永遠性という異論もまた復活するだろう。

## 4 時間の永遠性という異論

### 4.1 訳

#### 第98章

#### 永遠からある〔永遠の昔から続いている〕運動があったことを証明する異論とその解決

もし神が、変わることをない永遠の意志でもって新しい業を生み出せるなら、やはり、新しい業には先行している運動があるということになる。すなわち、我々が見て〔知って〕いる限りでは、作ろうとする意志は、今あって後にはなくなるもののためか、今なくて、未来にあることが期待されるもののためでなければ〔後のことや未来にまで〕延長しない。〔例えば〕人間が、夏のうちに、今ある暑さは寒さが到来するとなくなるだろうから、ある着物を、今ではなくて未来に着ようとの意志を有するように。それゆえ、神が永遠の昔から、なんらかの業を生み出そうと思っており、かつ永遠の昔には生み出さなかったのなら、なんらかの、かつてなかったものが未来にあることが期待されていたか、それ〔業〕とは別の取り去られるべきものがその時にはあったかである。このどちらの場合でも、運動なしに起き得ない。したがって、先行する意志によってなんらかの業が生み出されるには、なんらかの運動が先行しているのでなければならない。またそれゆえに、神の意志が諸物を生み出すことに関して永遠であり、かつ諸物が永遠の昔にはなかったなら、必然的に、それらを生み出すことには運動が先行することになり、かつ、その帰結として、動き得るものが先行しているということになる。これらがもし神によって生み出されたのであって、永遠の昔からあるのではないなら、さらに別の運動と動き得るものが先んじて実在したということになって、それが無限に続くことになる。

さて、この異論の解決を考えることは、もし普遍的な能動的作用者と特殊な能動的作用者との差異を考えるなら、考えることが容易にできる。すなわち、特殊な能動的作用者の有するはたらきが一致している様々な決まりや物差しは、普遍的な能動的作用者が前もって立てているものである。このことは、市民生活の場合に明らかである。すなわち、立法者が、法を決まり・物差しとして制定し、それ〔規則、規準としての法〕に従って、それぞれの特殊な裁判官は判決を下さねばならない。しかしながら、時間は時間のうちでなされた行為の規準である。すなわち、特殊な能動的行為者は、時間に一致してはたらきを有する。すなわち、以前ではなく今、なんらか一定の理由で行為するというように。

しかし、普遍的な能動的作用者、すなわち神は、そのような規準を、すなわち時間を定められ

たのであり、それも御自分の意志でそうされたのである。したがって、神が生み出した諸物のうちに、時間もまた含まれている。それゆえに、あらゆる事物について、神がそれ〔事物〕にどのように割り振ったかが、〔その事物の〕規準量であり、同様に、時間については、神がそれ〔時間〕にどのように与えたようと欲したかが、〔時間の〕量である。すなわち、時間と時間のうちにあるものが、神が、それらが存在することを欲したときに始まったように。

(中略)

この〔以上の〕ことは、世界のさまざまな量についても考えることができる。すなわち、神はなぜ、物的世界を、〔現にあるより〕上にあるいは下にあるいは別の違う方向でもなくこのような位置に創り上げたのか、とは問われない。というのは、世界の外に場所はないからである。しかし、かくかくの量が物的世界に、この〔世界のある〕位置の外には、どんな違う方向にも、それ〔世界〕に属するものは何もないように割り振られるということは、神の意志によって起きる。

また、たとえ世界以前に、時間がなかったとしても、また世界の外に場所はないとしても、それでも、我々〔世界以前、世界のことについて〕は次のような仕方で語る。もし我々が語るとしたら、世界が存在する前は、神のほかにも何もなかったということ、世界の外にはどんな物体もないということは、前と外〔という概念〕、時間あるいは場所〔という概念〕を用いては、想像力によつてのみ理解する者として〔そうするという仕方で〕。

## 4.2 註釈

この異論は、どの時点であれ、神がある時点で創造を行なったのなら、神の意志が永遠である限り、神が創造を決意しながら、それを実行しなかった期間があり、その間、なんらかの運動が存在していた、あるいは運動の数である時間が流れていたはずだ、というものである。そして、運動がある以上、運動し得るものもあつたはずである。すなわち、世界創造以前にも、なんらか運動し得るものがあつて、神は、世界創造を決意したが、その運動により状況が整うまで待っていたと考えられる。その運動し得るものもまた神が創造したのだとすると、それを創造することを決意してから、創造するまでの間の期間、運動し得るものがあつたはずであるということになり、これを無限に続けるわけにはいかないので、どこかで、神の創造に先立つ運動し得るものが神と同じく永遠にあり、それをなんらかの質料的存在と考えるなら、その運動が起きている場を何らかの意味での世界と呼ぶこともできただろう。

トマスはここで、それが質料的存在であり得るか否かは述べていない。論点をぼかさないためであろうが、世界創造以前の運動にのみ論点を絞っている。そして、時間そのもの、さらには場所すなわち空間そのものを世界と共に神は創造したので、世界創造以前には（以前という言い方がそれ自体、事実には即しておらず想像上のものであるが）、時間も空間も存在していない。ゆえに、ある時、神が創造を決意し、それから時間が経った後に創造したということはなく、また、世界創造以前に、別の世界すなわち別の空間と時間が、この世界を覆う外側の箱か枠組みのようにすでに存在していて、神はその中で創造を行なった、すなわち、その意味で世界は永遠である



ということはない。

つまり、神は、創造以後の存在とはまったく異なる無において、無から創造を行なったのであり、これは創造以後の世界に起こる、また神以外の存在者が起こす運動変化とは本質的に異なる事態である。

## 5. 現実態, 自然本性, 悪

### 5.1 訳1

#### 第74章

#### 被造の事物のうち、あるものは可能態をより多く、現実態をより少なく有し、 あるものは逆であること

しかし、どんなものでも、神への類似性を受け取っているという点では、貴く、完全なのだが、また神は可能態の混入なき純粹現実態であるので、存在者のうちで最上であるものが、より多く現実態で存在し、より少なく可能態を有しているものでなければならない、または、可能態での存在という点で最低のものであるものでなければならない。さて、これがどのようにしてかを、考えねばならない。

すなわち、神は常にいまし、かつその存在に関して変わることはない御方であるので、諸事物のうちで最低のものというのは、すなわち、神への類似をより少なく有するものというのは、生成と消滅を被る諸基体、すなわちある時は存在し、ある時は存在しないものである。そして、存在は事物の形相に従うので、このようなもの〔生成と消滅を被る諸基体〕形相を有する時に存在し、形相を欠く時に存在をやめるのである。したがって、それら〔生成と消滅を被る諸基体〕の間では、時には形相を有しながら時には形相を欠くものがなければならず、これを質料と我々は言う。したがって、このようなもの〔生成と消滅を被る諸基体〕は最低の事物に属し、質料と形相とから複合されたものでなければならない。しかし、被造の存在者のうちで最高のもは、神の存在に最高度に似るに至る。そのうちでは、存在することと存在しないことへの可能態はなく、神から創造を通して常にある存在を〔それらは〕獲得したのである。質料は、〔質料として〕あるがままのそのものとしては、形相によって存在するという存在への可能態であるので、このような存在者、存在することと存在しないことへの可能態がないものは、質料と形相との複合体ではなく、神から受け取ったその存在のうちで自存する形相のみ〔のもの〕である。そして、このような非物的実体は、消滅し得ないものであるのが必然である。すなわち、消滅し得るものには、常に存在しないことへの可能態があるが、既に述べたように、それら〔非物的実体〕のうちには〔存在しないことへの可能態は〕なく、だからこそ、消滅することはあり得ないのだ。

さらにまた、形相がそれから離れるのでなければ、何ものも消滅しない。すなわち、存在は常に形相に従うからである。そして、このような実体〔非物的実体〕は、自存する形相であるので、その形相からは離れ得ない。つまり、存在を失い得ない。だからこそ、消滅し得ないのだ。(後略)

## 5.2 註釈

純粹現実態である神を頂点とし、現実態をより多く有することで純粹現実態である神に似ているより多く似ているか、より少なく有しているため純粹現実態である神からより遠いかということによる序列があると説かれている。ここで、純粹現実態であるということは、消滅の可能性、存在しない可能性がないということと同義のこととして論じられている。そして、そしてまた質料は存在することと存在しないことへの可能態であり、それゆえに存在をやめ得るが、それに対して形相は、それ自体としては非物体的、すなわち非質料的存在であり、ゆえに、存在しないことへの可能態ではあり得ない。

質料は材料であり、形相が質料と合わさることですべてのものはそのものになる。質料的存在者は形相なしには存在し得ず、形相は質料そのものの中に本質的に備わっているものではないので、質料から離れ得るし、また実際に離れる。これは、質料的存在者は、それが何ものかを規定する本質を失い得るし、また実際に失う。それに対して、本質である形相は消滅することはない。本質は本質以外のものであり得ず、1人の人間の身体が破壊されてその人間が死んだとしても、人間の本質そのものは破壊されない。もし破壊されたとしたら、その瞬間にこの世から人間は「消滅」したはずだ。しかし、個々の人間は、人間性とは異なり身体なしには存在し得ない。すなわち、人間性という形相が質料と合成されるのでなければ、個々の人間は存在し得ない。

人間に関しては、トマスは次のように論じている。

## 5.3 訳2

### 第152章

#### 靈魂の体から分離はどのようなわけで、自然本性に適っているか そしてどのようなわけで自然本性に反しているか

そして、靈魂が体から分離されているということは、偶有でなく、自然本性に適っていると思われる。すなわち、人間の体は、反対物が複合してできたものである。そして、このようなものはすべて、自然本性的には、消滅するものである。したがって、人間の体は、自然本性的には消滅するものである。そして、体が消滅すると必然的に、靈魂は分離して存続するのでなければならぬ。先立つ箇所で示されたとおり、靈魂が死すべきものでなければ。それゆえ、靈魂が体から分離していることは自然本性に適っているように思われる。

したがって、考えるべきは、自然本性に適うということはどういうことで、自然本性に反するということはどういうことか、ということである。先立つ箇所で示されたとおり、理性的靈魂は、他の形相のあり方を超えて、物体的質料全体の能力を超え出ている。このことはその〔理性的靈魂の〕知性によるはたらきが証明している。これ〔知性によるはたらき〕を〔理性的靈魂は〕体なしに有するからである。したがって、物体的質料は、それ〔理性的靈魂〕に相応しく適合されてあるために、体になんらかの状態が加えられていなければならない。これ〔体に加えら

れたなんらかの状態]によって、質料はこのような〔理性的靈魂という〕形相に相応しくなったのだ。そして、この〔理性的靈魂という〕形相が、神のみから存在へと、創造を通して出てくるように、かの物的自然を超える状態もまた、神のみによって人間の体に帰せしめられた。それ〔物的自然を超える状態〕は、明らかに、体そのものを消滅しないものとして保存し、そのようにして靈魂の恒久性に適合せしめるものである。そして、この状態は、人間の靈魂が神からはなれない限りは、人間の体のうちに留まっていた。しかし、人間の靈魂が、罪によって神から離れると、人間の体もまた、かの超自然的な状態を滅ぼしてしまうのが相応しかった。すなわち、それによって〔人間の体は〕動くことなく靈魂に従っていた状態を。そして、そのようにして人間は死なねばならなくなったのである。したがって、体の本性に目を向けるなら、死は自然本性的なものである。しかし、靈魂の本性に、そして、靈魂のために自然を超えて人間の体に初めに加えられていた状態に目を向けるなら、偶有的であり、自然本性に反している。靈魂と肉体とは1つであることは自然本性的だからである。

#### 5.4 註釈

神の創造においては、神が本来人間をそういう存在で有らしめようとしたあり方があった。そして、質料による人間の身体は、理性的靈魂という形相にふさわしいあり方となり、靈魂の恒久性、すなわち形相の消滅不可能性とと同じく身体も恒久的に存在するはずだった。「人間の靈魂が、罪によって神から離れると、人間の体もまた、かの超自然的な状態を滅ぼしてしまうのが相応しかった。すなわち、それによって〔人間の体は〕動くことなく靈魂に従っていた状態を。そして、そのようにして人間は死なねばならなくなったのである」。

罪、すなわち悪についてトマスは次のように論じている。

#### 5.5 訳3

##### 第114章

##### 善と悪の名により、事物のうちで何が理解されるのか

したがって、考えなければならないのは、善という名で完全な存在が理解されるように、悪という名で理解されるのは完全な存在の欠如であるということだ。しかしながら、欠如は、本来の意味で受け取ると、生まれ持ったものの〔欠如〕であり、生まれ持った時の欠如であり、生まれつき持っているものがどのようなものであるかということに関する欠如であるので、明らかに、悪と言われるのは、持っていてしかるべき完全さを欠いていることによる。それゆえ、人間がもし視覚を欠いているなら、それは彼〔人間〕には悪であるが、石には悪でない。〔石は〕生まれつき視覚を持たないからである。

## 第115章

### 自然本性が悪であるのは不可能なこと

そして、なんらかの自然本性が悪であるということはありません。すなわち、自然本性はすべて、現実態か、可能態か、あるいは両方の複合か〔のいずれか〕である。そして、現実態であるものは完全であり、善としての性質を帯びている。可能態としてあるものは、自然本性的に、現実態で存在することを欲するからである。一方、善は、すべてのものが欲するものである。それゆえ、現実態と可能態とから成る複合体もまた、現実態を分有している限りで、善性を分有している。そして、可能態は、現実態に関わる限りで、善性を有している。そのしるしとなるのが、可能態が、現実態と完全さをより受け入れられるだけ、価値が高くなる。したがって、〔結論として〕残るのは、それ自体として悪である自然本性はないということである。

さらにまた、どんなものでも、それが完成するというのは、現実態になることによってである。すなわち、現実態はものの完成だからである。しかしながら、対立するもの場合は、〔一方が〕他方のものと混合されることで完成するというのではなく、むしろ破壊されるか、縮減する。またそうであるなら、悪も、善の分有によって完成することはない。ところで、自然本性はすべて、存在を現実態として有することで完成する。またそうであるなら、善なる存在はすべてのものに欲せられるべきであるので、自然本性は善の分有によって完成する。それゆえ、どのような自然本性も悪ではない。

さらに、あらゆる自然本性は、その存在を保つことを欲し、できる限り破壊を避ける。したがって、善はすべてのものが欲するものであるが、一方悪は反対にすべてのものが避けるものであるので、こう言わなければならない。どんな自然本性であれ、そのものとしてあるということは、それ自体として〔他の理由を必要とせず〕善であり、そのものとしてないということは悪である。そして、悪として存在することは善ではなく、かえって悪として存在しないことが、善の本質のもとに捉えられる。それゆえ、どのような自然本性も悪ではない。

#### 5.6 註釈

悪は完全な存在の欠如であるとした上で、自然本性的に備わるべきものが備わっていないのは悪であると論じられる。つまり、ここでは完全な存在と自然本性とが同義として論じられている。この視点は、先の人間の霊魂が身体から離れることが自然本性的か否かという議論にも通底している。

自然本性は、現実態のみのもので、可能態のみのもので、現実態および可能態の複合が考えられるが、いずれの場合にも悪はありません。自然本性はすべて、存在を現実態として有することで完成し、善としての性質を帯びており、現実態と複合した可能態は、複合によって現実態を分有している限りにおいて善性を分有するとされ、可能態は現実態に向かう限りで善性を有しているがゆえに、あらゆる意味において自然本性は悪ではありません。

つまり、悪は存在から自然本性からの逸脱であるということだが、ここでは、存在が根源であり、存在があってこそ現実態も可能態もあるという、質料もまた創造されたものであることを論じた際にトマスが用いていた図式が、自然本性という概念に媒介されて表れてきている。と同時に、可能態は5.1での議論でもそうであったが、あくまで存在することも存在しないことも可能だということであって、それ自体が積極的に存在しないことへと、あるいは無へと向かっているわけではない。それは、ここで可能態が自然本性の、言わば一部として論じられていることでおいっそう強調されると解釈できよう。

つまり、悪に向かうということとは、自然本性に本来備わっている善性の現実態はもちろん、今現在可能態に留まっているあらゆる傾向に反して、存在の欠如へと向かうということであり、それは人間のあり方への反逆であり、人間でなくなろうとする努力であるとすら言えるだろう。

## 6. まとめ

2から5までの議論をまとめると次のようになろう。トマスの議論によれば、神による創造、事物を存在させるということは、運動変化とはまったく異なる事態であり、無から起きたことである。無は、通常我々は、無そのままのものとしては理解することができず、創造の後には存在しているなんらかのものがそこにはまだなかったという想像でしか理解できない。そこから、存在そのものである神は、何の材料も必要とせず世界を、時間および空間と同時に創造したのであった。被造物には、現実態の度合いによる序列があるが、これは同時に存在する可能性の純粋さの序列でもある。人間は消滅し得るものであるが、これは罪という悪の結果であり、悪に向かうということは、自然本性に備わる現実態はもちろん、可能態にも反する存在の欠如、あるいは無を志向することである。

## 文献表

### テキスト

1. S. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in : *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae*, *Grundriss der Glaubenslehre*, übersetzt von Hans Louis Fäh, Heidelberg 1963
3. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J. Regan, New York 2009
4. Thomas Aquinas, *Aquinas's Shorter Summa*, *St. Thomas Aquinas' s Own Concise Version of His Summa Theologica*, Manchester 1993

## 参考文献

1. Otto Herman Pesch, *Thomas von Aquin, Grenze und Größe mittelalterlicher Theologie, Eine Einführung*, Mainz 1995
2. Jean-Pierre Torrell, O.P., *Saint Thomas Aquinas, vol. 1., The Person and His Work*, translated by Robert Royal, Whashington D.C. 1996